

本書は、大学の研究者による執筆が大半を占めている。そのため、読むことにやや粘り強さが必要とされる。しかしそれを超えて、徹頭徹尾、子どもの主体性を考える教育のあり方を主張し、それを継続する理念と信念を学べる本である。とにかく読中読後、いろいろと考えさせられる。いくつか疑問が湧いてこないこともない。会がかつて批判した生活科を、今どう評価するのか。自己の論拠の妥当性を奪いかねない相対主義、多元主義をどう限定するのか。TPO・対象等に応じた、学習方法の多元主義は許されないのか、等々。今後も会の主張、動きに注目していきたい。

■図書紹介■

寺本 潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己著

『地理の教え方』

古今書院, 1997年, 173頁, 2,400円*

松崎 康弘*

学校教育における地理教育の在り方が問われている。21世紀が間近に迫るなかで、「(情報化社会など) 変化する社会への対応」「[生きる力]の育成」「新しい学力観(関心・意欲・態度の重視)」といったキーワードが提示され、教科教育の各分野で検討されているが、実際は旧態依然としたスタイルの地理の授業が行われていることが少なくないのではないか。また、「地理は暗記ものである」という意識から生徒の「地理離れ」が進み、社会科解体・世界史必修の流れとも相まって、特に高等学校における地理教育が危機的な状況にあるといっても過言ではないであろう。

本書は、これからの地理教育学を担っていく4名の著者によって、高等学校地理の授業づくりの新しい在り方について、具体的な事例を踏まえて書かれたものである。

第1章「ステップアップ 地理を識る」では、紀行文・映像・地図の作成や収集をもとに地理を「識る」ことが説かれている。「識る」と表現しているのは「体験は情報に勝る」という観点からであり、授業者がそのような観点に基づいて地理の授業づくりをすべきであるとしている。また、映画制作を地理の授業に取り入れようとしたり、「ユニークな地図」「高校生の好む地図」などの収集のような、高校生の実態をふまえた教材づくりを推奨している。

第2章「新しい地理の授業づくり」では、地理とは切り離すことのできない「地図」というテーマ、近年の学校教育において特に注目を集めるようになった「環境」「情報」というテーマ、そして生徒たちの興味・関心が高いであろう「旅行」というテーマで、「新しい地理の授業づくり」が試みられている。小・中学校における「総合的学習の時間」の登場で、高等学校地理が「環境」「情報」というテーマについて担えることが何かということの一端が、飯能市の福田英樹氏の実践などを事例として示されている。

第3章では「地理授業づくりのコツと急所」と題して、プレゼンテーション、AV機器利用、フィールドワーク指導、テスト問題作成のそれぞれの「コツと急所」について記述されている。テスト問題作成については、「知っているだけでは解けない問題」、「基礎的・基本的知識+思考

*筑波大学大学院博士課程

力+資料読解力」を正解に必要な要素とする問題を「良い問題」とし、1997年のセンター本試験の問題を事例としてあげている。著者自身が述べているように、客観テストのみならず、論述形式の問題についてもさらなる検討が必要であろう。

第4章では、「教え方のニュー・バージョン」としてシミュレーション、ネットワーク、クロスカリキュラム、ディベートの4点をあげている。シミュレーション教材を生かしたCD-ROM、電話やe-mailを活用したネットワークなどの利用という新しい「教え方」は、今後の学校教育でさらに取り入れられていくこととなろう。ただ、ディベートについては、地理学習における意義をもう少し掘り下げて欲しかったように思う。

第5章では、「地理教師になるための基礎知識」として、内外の地理教育諸団体等の活動を紹介している。この記載によって、多くの地理教師によって学会活動が活性化されることを願う。本書を参考として、各校の実態にあわせて新しい地理の授業づくりが推進されることが望ましいと思われる。